修道

No. 62

題字は吉田学(高21)書

修道学園同窓会連合会
修道学園（中・高）同窓会
〒730-0055 広島市中区南千田西町8-1
TEL(082)241－8291　FAX(082)249－0870
TEL(082)２４１－６６８６(同窓会直通)
E-mail　dosokai@shudo-h.ed.jp
URL http://www.shudo-h.ed.jp/dosokai/

畠眞實氏による講演会『藩校・修道・十竹先生』の様子

目　次

同窓会ニュース

平成19年度予算を承認 ……1244

平成18年度決算を承認 ……1246

支部だより

2007年度修道学園同窓会

関東支部のつどい、盛大に開催… 亀本　和彦 …1248

第51回(平成19年度)

修道医会の開催報告…井内　康輝 …1253

同期会報告

修道中学入学70周年を祝う… 北川洸太郎 …1256

「旧中37・38回同期会」… 佐々木　博 …1257

四期会総会報告……河野富士雄 …1258

特別寄稿

山田十竹先生の日記を読む（その２）

「十竹軒日録」……畠　　眞實 …1159

人物往来

全身全霊で次の世代へ……平山　郁夫 …1271

日本水泳連盟が特別功労賞表彰… 横地森太郎 …1271

都市活性化へ経済界連携…山本　一隆 …1271

ＮＴＴ社長に三浦氏……三浦　　惺 …1272

不正解明へ進化問われる「有尽無報」…林　　正夫 …1272

もっとサービス向上……大田　哲哉 …1273

当選おめでとうございます ……1273

訃　報 ……1274

事務局だより ……1275

同窓会ニュース

平成19年度予算を承認

合同幹事会記録

日　時　平成19年３月28日(水)　18:30～19:30
場　所　修道中学校・修道高等学校
　　本館３階　大会議室

出席者（敬称略）
大田　哲哉　　髙木　一之　　土井　洋二
貫名　　賢　　伊藤　學人　　松田　　弘
廣谷　　清　　中村靖富満　　上野　淳次
脇浦　則行　　下村　幸男　　仁井田幸雄
菊田　良三（代理：河野　富士雄）
上向井快三（代理：渡辺　浩其）
桐林　正樹　　増原　義剛（代理：菊崎　賢）
今井　誠則（代理：宮原　信男）
笹野　正明（代理；山本　正一）
藤居　道正　　河口龍太郎　　中本　高明
中本　憲治　　福原　俊二　　和田　章宏
仮田　典久　　中島　弘規　　大方幸一郎
北村　直幸（代理：西村　昌浩）
田戸　　亨　　西田　天次　　西尾　尚士
住田　　進　　小川　文象　　江川　準一
程川　道彦　　住田　　敏　　久保　弘睦
堀内　武彦　　林　　春樹　　佐々木慶市
酒井　一成

《事務局》
若宮　寿仁　　石井健二郎　　田中　佳樹
近川　俊治　　島田　枝奈

《同窓大会世話人》
高校51回世話人

議事及び審議の結果

議案の審議に先立ち、修道学園（中・高）同窓会及び修道学園同窓会連合会との合同幹事会を開催する旨の宣言がなされた。

大田　哲哉同窓会連合会会長代理から開会の挨拶があり、慣例により大田会長代理が議長となることが了承された。

議案

1．（中・高）同窓会及び同窓会連合会役員等の選出について

大田会長より、今年の２月に逝去された難波貞治連合会幹事の後任の選出及び学園評議員の後任

の選出、(中・高)同窓会会則の『幹事選出における申し合わせ事項』第1項に定める同窓大会担当世話人卒業回数からの幹事選出について諮られ、先に開催した正副会長会議で検討した選考結果が報告、了承された。その後当日ご出席の堀内武彦氏、小川文象氏から就任の挨拶がなされた。

また、この3月にご逝去された小尻正俊幹事の後任の幹事については、現在選考中である旨が報告された。

連合会幹事

辞　任	新　任
難波　貞治(短大3回)	堀内　武彦(短大4回)

中 高 幹 事

小川　文象(高51回)

2．正会員登録について

事務局より、橋爪寛行(はしづめ　ひろゆき)氏(該当回数旧中39回)を(中・高)同窓会会則第5条第2号により正会員として登録したい旨の説明がなされ、承認された。

3．平成19年度修道学園(中・高)同窓会予算について

平成19年度修道学園(中・高)同窓会資金収支予算書(案)について事務局から説明がおこなわれた。収入の部は、入会金879,000円　終身会費2,051,000円　名簿売上代1,000円　預金利息156,000円　雑収入500,000円　事業基金引当特定預金からの繰入収入1,000円　名簿作製引当特定預金からの繰入収入1,000円　陶板画レプリカ売上代150,000円　小計は3,739,000円となり、前年度繰越金23,826,000円を合わせると、収入の部の合計は27,565,000円となる。支出の部は、事業費2,091,000円(内訳:名簿作製費1,000円　激励費400,000円　同窓大会補助金200,000円　その他の事業費1,490,000円)　業務費1,139,000円(内訳:会議費320,000円　通信費425,000円　慶弔費200,000円　諸費194,000円)　その他の支出390,000円(内訳:連合会分担金293,000円　事業基金引当特定預金への繰入支出96,000円　名簿作製引当特定預金への繰入支出1,000円)　予備費500,000円　小計は4,120,000円となり、収入合計から差し引いた次年度繰越金は23,445,000円となる。支出の部の合計は27,565,000円となる。

4．平成19年度修道学園同窓会連合会予算について

平成19年度修道学園同窓会連合会資金収支予算書(案)について事務局から説明がおこなわれた。収入の部は、分担金1,428,000円　預金利息72,000円　雑収入1,000円　事業基金引当特定預金からの繰入収入1,000円　小計は1,502,000円となり、前年度繰越金16,950,000円と合わせると収入の部の合計は18,452,000円となる。支出の部は、事業費350,000円　業務費720,000円(内訳:会議費320,000円　通信費150,000円　慶弔費150,000円　諸費100,000円)　その他の支出33,000円(内訳:事業基金引当特定預金への繰入支出32,000円　名簿作製引当特定預金への繰入支出1,000円)　予備費500,000円　小計1,603,000円となり、収入合計から差し引いた次年度繰越金は16,849,000円となる。支出の部の合計は18,452,000円となる。

以上、(中・高)同窓会予算および同窓会連合会予算は審議の結果原案どおり承認された。

広島修道大学同窓会からの報告

上野会長より、同窓大会については今年度についても11月の第1土曜日に開催する旨の報告があった。

広島修道大学大学院同窓会からの報告

脇浦名誉会長より、昨年度は30周年記念の記念大会で、80名ほどが出席され、盛大に開催した旨の報告がなされた。

伊藤担当副会長からの報告

9月8日(土)18時からリーガロイヤルホテル広島で開催する旨の報告がなされた。その後、世話人の綿岡氏より、お力添えをお願いしたい旨の挨拶がなされた。

同窓会ニュース

平成18年度決算を承認

平成19年６月１日
同窓会連合会、（中・高）同窓会幹事会

合同幹事会記録

日　時　平成19年６月１日(金)　17:50～18:10
場　所　メルパルク広島　６階　平成

出席者（敬称略）

大田　哲哉　　高木　一之　　貫名　　賢
伊藤　學人　　松田　　弘　　廣谷　　清
中村靖富満　　上野　淳次　　脇浦　則行
河野　徳男　　藤原　　幹　　阿曽沼龍雄
下村　幸男　　仁井田幸雄
菊田　良三（代理　河野富士雄）
上向井快三　　山下　　泉　　桐林　正樹
増原　義剛（代理　菊崎　賢）
今井　誠則　　藤居　道正　　福原　俊二
和田　章宏　　佐々木　明　　川崎　博行
大内　茂稔　　久保　康治
大方幸一郎（代理　筒井　直樹）
北村　直幸（代理　西村　昌浩）
三宅　泰雄　　小川　文象　　中島　弘規
山本　繁生　　岸　　英雄　　細田　信行
庄子　佳良　　程川　道彦　　畑尻　隆司
辻　誠治

《事務局》

田中　佳樹　　近川　俊治　　島田　枝奈
若宮　寿仁　　石井健二郎

議事及び審議の結果

議案の審議に先立ち、修道学園同窓会連合会及び修道学園（中・高）同窓会との合同幹事会を開催する旨の宣言がなされた。

大田　哲哉同窓会連合会会長代理から開会の挨拶があった後、慣例により大田　哲哉同窓会連合会会長代理が議長となることが承認された。

議案

１．同窓会役員の選出について

同窓会役員の選出について、大田会長代理より今年の３月に逝去された小尻正俊幹事の後任の選出について諮られ、先に開催した正副会長会議で検討した選考結果が報告、了承された。その後選任された藤原幹氏から就任の挨拶がなされた。

連合会幹事

辞　任		新　任	
小尻　正俊(旧中39回)		藤原　　幹(旧中39回)	

中 高 幹 事

小尻　正俊(旧中39回)		藤原　　幹(旧中39回)	

２．平成18年度修道学園同窓会連合会収支決算について

事務局より、平成18年度修道学園同窓会連合会資金収支決算書について説明がなされた。収入の部は、分担金1,454,000円、預金利息32,000円、雑収入０円、事業基金引当特定預金からの繰入収入０円、小計1,486,000円となり、前年度繰越金16,158,800円を合わせると、収入の部の合計は17,644,800円となる。支出の部は、事業費322,875円、業務費335,783円（内訳：会議費105,632円、通信費35,292円、慶弔費 179,250円、諸費15,609円）、その他の支出32,000円（内訳：事業基金引当特定預金への繰入支出32,000円、名簿作成引当特定預金への繰入支出０円）予備費０円、小計690,658円となり、収入合計から差し引いた次年度繰越金は16,954,142円となる。支出の部の合計は17,644,800円となる。

次に貸借対照表についての説明が行なわれ、資産の部は事業基金引当特定預金7,650,740円、名簿作製引当特定預金504,727円、一般会計預金16,954,142円となっている。負債・資本の部は、資

本が合計25,109,609円となっており負債はない。

続いて、辻監査より、証憑、帳簿、預金通帳等の関係書類を監査した結果、いずれも適正に執行、管理されていた旨の会計監査報告がなされた。

同窓会連合会決算は、全員異議なく承認された。

3．平成18年度修道学園（中・高）同窓会資金収支決算について

事務局より、平成18年度修道学園（中・高）同窓会収支決算書について説明がなされた。収入の部は、入会金828,000円、終身会費1,932,000円、名簿売上代0円、預金利息96,000円、雑収入503,262円、事業基金引当特定預金からの繰入収入0円、名簿作製引当特定預金からの繰入収入0円、陶板画レプリカ売上代360,000円、小計3,719,262円となり、前年度繰越金23,708,929円と合わせると、収入の部の合計は27,428,191円となる。支出の部は、事業費2,404,285円（内訳：名簿作製費0円、激励費410,000円、同窓大会補助金200,000円、募金事業費0円、その他の事業費1,794,285円）、事務費794,498円（内訳：会議費104,559円、通信費343,865円、慶弔費219,250円、諸費126,824円）、その他の支出372,000円（内訳：連合会分担金276,000円、事業基金引当特定預金への繰入支出96,000円、名簿作製引当特定預金への繰入支出0円）、予備費353,115円（内訳：激励費110,000円、通信費223,865円、慶弔費19,250円）、小計3,570,783円となり、収入合計から差し引いた次年度繰越金は23,857,408円となる。支出の部の合計は27,428,191円となる。

次に貸借対照表についての説明が行なわれ、資産の部は事業基金引当特定預金19,218,716円、一般会計預金は23,857,408円となっている。負債・資本の部は、資本が合計43,076,124円となっており負債はない。

続いて平成18年度修道学園（中・高）同窓大会について貫名担当副会長より報告があり、続いて同窓大会世話人より平成18年度修道学園（中・高）同窓大会決算書（幹事会資料3－2）についての説明がなされた。収入の部は、補助金200,000円、大会誌広告協賛3,860,000円、会員券裏面広告協賛150,000円、会員券売上2,184,000円、寄付金122,000円、預金利息559円、収入の部の合計は6,516,559円となっている。支出の部は、大会誌作成費2,249,100円、大会運営費2,413,209円、広告宣伝費297,780円、事務費106,461円、通信費247,590円、交通費216,688円、会議費370,995円、手数料107,100円、収入から差し引いた余剰金は507,636円で、平成19年度において本会計へ繰り入れる予定である旨の説明がなされた。支出の部の合計は6,516,559円となる。

続いて、中島監査より、証憑、帳簿、預金通帳等の関係書類を監査した結果、いずれも適正に執行、管理されていた旨の会計監査報告がなされた。

中・高同窓会及び同窓大会決算は全員異議なく承認された。

4．報告事項

支部総会及び同期会の開催日時・場所等についての説明がなされた。その後大田会長代理より、平山郁夫シルクロード美術館新館増築寄附事業について、ご協力いただきたい旨の説明がなされた。

幹事会後、修道学園史研究会会長（修道中学校・修道高等学校元校長）　畠　眞實氏による『藩校・修道・十竹先生』と題された講演会がおこなわれた。

講演会後、懇親会が開催された。大下　龍介連合会会長より開会の挨拶がのべられた。森本　弘道連合会名誉会長の乾杯の音頭により会食となった。歓談中、同窓大会の案内がおこなわれた。中・高同窓会は伊藤　學人担当副会長から、大学院同窓会は脇浦　則行会長から、大学同窓会は上野　淳次会長から、それぞれ今年度の抱負が語られた。高木　一之会長代理による締めの乾杯を行ない散会となった。

支部だより

2007年修道学園同窓会関東支部のつどい、盛大に開催！
－修道学園同窓会関東支部からの報告－

亀　本　和　彦（高校17）

毎年、紫陽花の花の終わる頃、７月の第２月曜日に「修道学園同窓会関東支部のつどい」が開催されます。今年は去る７月９日に関東地方に在住する483名の卒業生、21名の同伴者が出席して東京ドームに程近い東京ドームホテルで盛大に開催されました。広島からは林修道学園理事長、大田修道学園同窓会会長、田原修道中学・高等学校校長が来賓として出席していただき、総勢507名の大規模な同窓会となりました。

さて、関東支部では、毎年、西暦年の下１桁と一致する回期生が総会の企画・運営を担当するルールになっています。（言い換えると、毎年、70歳、60歳、50歳、…、20歳の老壮青と年齢の異なる卒業生が共同して担当することになります。）また、総会の案内状は事務局で一括して印刷しますが、発送や出席の呼びかけは卒業年次毎に選ばれた学年幹事が担当して、同期生に出席を呼びかけます。

この方式は、その年の実行委員会が他の期の実行委員会に負けない総会にしようと知恵を絞り、団結して総会の企画・運営に当たり、また、各学年幹事も他の年次に負けない出席者を出そうと同期の連携の強化に努める点で、同窓会の活性化に有効に機能しています。

2007年の今年は７の期の卒業生（７回生、17回生、27回生、…、57回生）が全員実行委員となって担当しました。

私達、７の期は昨年８月以来、30回以上の会合を持ち、世代の違う卒業生が古内実行委員長（17回）の下で、「総会の成功」という一つの目標に向かって、一致団結して、準備作業を重ね、総会直前の最終打合せには約40名の実行委員が出席し、また、当日総会運営に当たった実行委員は100名を超えました。

それでは、実行委員会の準備段階から当日の運営までを簡単に説明致します。

まず、準備段階の初期は総会のコンセプトの決定に力が注がれました。

最近の総会はイベントが多くなっていましたが、今年の総会のコンセプトとしては、「卒業生同士の懇談」を中心に据え、「ふるさと」（＝「修道は今」、「ふるさとのチーム」、「ふるさとの味」）をテーマにすることが早い段階で決まりました。

次の検討課題は、総会に先立って例年行われている「講演会」です。講師には、2004年は三菱重工業佃和夫社長、05年はＮＴＴ東日本の三浦惺社長（現・ＮＴＴ社長）、06年は弘中淳一郎弁護士と、実行委員の中からその世界での第一人者を選んでおり、今年は肝臓病治療の権威で2006年医師国家試験委員長の井廻道夫昭和大学医学部教授（17回）に「生活習慣病とその対策」を話してもらうことが早い段階ですんなりと決まりました。

このように、総会のコンセプトや講演会の講師を早い段階で決め、最後までブレなかったことで、その後の作業は、ある部分は実行委員が一致団結し、ある部分は分担して準備を進め、総体としてスムーズにいきました。

まず、「卒業生同士の懇談」は、ほぼ毎年、卒業年次別のグループ分けと年次を超えたグループ分けの２部構成になっており、過去には出身市町村・小学校別とか職業別とか現在の居住地別等の例がありましたが、今年は趣味別のグループ分けで卒業年次を超えた卒業生の輪を拡げて貰おうということがすぐに決まりました。

また、「修道は今」については、趣味との関連

から修道のクラブ活動、なかでもスクールバンド班の活躍にスポットを当てた映像を製作して紹介することになり、映像の制作から当日の撮影までを、27回の浅尾、住田、水島君等が中心になって、精力的に準備を進めました。「ふるさとの味」については、広島風お好み焼をみんなに味わって貰おうということで、オタフクソース（39回の佐々木君）のご協力で大量のお好み焼が無料提供して頂けることになりました。「ふるさとのチーム」の応援というテーマは若干の紆余曲折がありましたが、広島東洋カープの鈴木氏（24回）のご協力で抽選会の景品に広島カープの主力投手のサインボール、主力打者のサイン入りバット等の提供を受け、実現できました。

あとの課題は、実行委員の確保と円滑な総会の運営です。

実行委員の確保は、７回の杉山、伊達の両先輩から57回の現役学生の住川君まで、年齢差40歳の各学年幹事が同期生に対して精力的な働きかけを行い、総会の１ヵ月前には必要な人員の確保のメドが立ちました。この場合、７回の先輩たちの真剣な取り組みは、後輩たちにとって大きな刺激になりました。

あとは総会の円滑な運営にむけての最終点検をするだけとなり、受付の手順や抽選会のやり方などの細かい詰めが直前まで行われました。

また、総会の司会をつとめる河内山さん（27回生の戸田君のパートナー）を中心としたリハーサルも３回行い、広島からの応援参加で総会の最後を飾る校歌斉唱の指揮を執ってくれる中本君（17回）も総会直前までリハーサルを重ね、準備万端で本番を迎えました。

入念な打ち合わせ

当日総会運営に当たった実行委員は100名を超え、その多くは受付開始の約２時間前に集まりました。実行委員控室はあふれかえっており、みんなのやる気が満ちていました。因みに、当日の出席卒業生の年次別の１位から３位までは７の期が占めていました（１位：17回（47名）、２位27回（33名）、３位７回（25名））。

各実行委員は、総会運営のために組織された、受付・会費徴収班、映像班、カメラ班、抽選会班などのチームに分けられ、卒業生の参集、総会の開会に向けて万全の体制が整いました。特に、映像班（班長：住田君（27回））、カメラ班（班長：伊野本君（17回））等は事前の準備を十分行ったうえで、八面六臂の活躍を期して意気軒昂でしたし、また、７回の実行委員は同世代の卒業生を暖かくお迎えしたいということで、進んでその受付を担当されたことは実行委員の一体感の醸成に繋がりました。

そして、気になっていた当日の天気もまずまずで、受付開始予定の午後5時50分になる前から卒業生がどんどん集まりだしました。年配の人、若い人、見慣れた顔、新しい顔と色々な卒業生で受付の前が一杯になりました。今年の出足は順調です。

受付時間を繰り上げて受付の開始です。受付を担当する実行委員はてきぱきと受付をこなしていきます。予想していたように当日出席の人もかなりいましたが、今年は「当日受付」のブースを設け、順調に受付をしていきました。今年は当日出席者が40人近くもいて、途中で名札入れやプログラムが足りなくなるハプニングもありましたが、全般的には順調に受付業務が進められました。

それでも、受付周辺では、人があふれ、卒業生の輪がいくつもできてきました。講演会の開始予定まで時間はありますが、予定時間を早めて、誘導班が受付の終わった人たちを講演会場に案内して、受付の前の混雑の解消に努めます。実行委員にとっては、嵐のような時間ですが、みんなが心を一つに、暖かく卒業生を迎えます。

午後６時20分、予定通り、井廻教授の「生活習慣病とその対策」の講演が始まりました。健康

ブームの現在にピッタリのテーマで、みんな熱心に耳を傾け、「酒は適度に飲むべし」との話に胸を撫で、講師のユーモア一杯の話に笑いも生じていました。この講演が無事に終了すると、いよいよ総会会場への移動です。

井廻教授による講演

今年の総会は、前半が趣味別のテーブルになっています。誘導班の「こちらがゴルフ！」、「こちらが音楽！」などの声に誘導されて、各人は自分の趣味のテーブルに着きます。

そして、授業開始のチャイムに合わせて、河内山さんの司会で総会の開始です。

オープニングは、古内実行委員長の開会宣言、江崎事務局長（20回）の会計報告、林関東支部会長（1回）の開会挨拶のあと、県議会議長になられた林修道学園理事長（11回）と広電の社長の大田修道学園同窓会会長（11回）の来賓挨拶が続き、田原修道中学・高等学校校長の来賓挨拶となりました。特に、田原校長の挨拶は、総会の熱気に負けないくらいの熱意を込めたもので、そのなかで、「東大ツアー」への関東支部への感謝と修道の復活への報告は出席者にとって力強いものを感じさせました。

林理事長挨拶

大田同窓会会長挨拶

田原校長による乾杯

田原校長の乾杯で、前半の歓談タイムがスタートしました。スクリーンでは修道関係のスライドショーが流れ、会場ではドームホテルの用意した料理やこの日800食も用意された広島風お好み焼を食べたり、酒を飲んだりしながら趣味の話題で弾んだ交流の渦がいくつもできていきました。途中、多数派のゴルフ代表の横山君（17回）へのインタビューや少数派のマジックを代表して副島君（29回）のテーブル・マジックが挿入されました。

前半の最後は、映像班が製作編集した映像「修道は今」の上映です。新しい校舎の建設状況、新旧制服の上映に続いて、修道の2006年度のクラブ活動の報告がなされました。なかでも、関東支部の面々には馴染みのないスクールバンド班の活躍の紹介には、多くの卒業生が目を細めるとともに驚きの声が上がっていました。また、新旧制服の紹介の一環で挿入されたコント風の制服ショーは笑いを呼びました。

総会も半分の時間が経過し、スクールバンド班のコンサート映像の音楽に合わせて、後半の学年別のテーブルに移動します。

「ふるさとの味」広島風お好み焼き

今度は、昔なじみの同期生の顔合わせで、色々なところで歓声が上がります。一眼レフデジカメ

修道は今

抽選会の様子

を持ったカメラ班も各テーブルの記念撮影のために引っ張りだこです。今年は、同期だけでなく、近くの学年との交流もできるようにテーブル配置をしたために、あちらこちらで修道当時の先輩・後輩が昔話の花を咲かせています。

このような歓談をしているうちに、最後のイベントの大抽選会が始まります。今年はみんなが気合いを入れて集めた景品の数が91点で、出席者の約６人に１人に当たる計算です。その内容も、高級旅館やドームホテルのペア宿泊券計３組や前にも述べた広島カープの主力投手のサインボール５個、主力打者のサイン入りバット５本、ブラウン監督退場記念Ｔシャツ等と豪華版です。なかでも、前田選手や新井選手のバットや黒田投手のサインボールなどはみんなの垂涎の的です。

この抽選会を抽選会班（班長：津田君（17回））の面々が盛り上げ、当選番号がスクリーンに映し出されると会場のあちこちで歓声が上がります。カープ関係の景品のときは、週刊ベースボールの柳本編集長（27回）が各選手や景品についてアドリブの解説をしたこともあり、いやがうえにも会場の熱気は最高潮になり、当選者の中には喜びの余りマイクに向かって走っていき、喜びのコメントをいう人まで出て来ました。ちなみに、１番人気の前田選手のバットは偶然にしては出来過ぎですが、修道卒業生の月例会「修道サロン」の場所を提供して頂いている会員制クラブのオーナーに当たりました。毎月の実行委員会はこの「修道サロン」で開いていて、総会の準備には大いに貢献された人でしたので、実行委員一同、感動しました。

この抽選会が終わると、閉会式です。

まず、今回（７の期）と次回（８の期）の実行委員が壇上に上がり、その紹介があったあと、いよいよ早大応援部ＯＢの中本君（17回）の指揮で、エールと校歌斉唱です。今年は、この総会のためにスクールバンド班がわざわざ演奏してくれた校歌の演奏映像がスクリーンに大きく映し出され、それに合わせて、みんなが「安芸の小富士に…」を歌います。オールドボーイも修道生に戻る瞬間です。そこここに肩を組んでウェイブしながら大声で歌う集団ができています。総会最大のイベントです。指揮の中本君も本領発揮、大声で指揮します。会場は修道健児の熱気で一杯です。

この熱気の冷めやらぬ中で、野崎幹事長（19回）が閉会宣言・挨拶を行い、終業のチャイムが鳴って、今年の総会はあっという間に無事閉幕しました。

みんなは、来年の再会を期しながら、三々五々帰って行きましたが、会場内で同期の記念写真を撮るグループや二次会に流れるグループと興奮冷めやらぬグループもいます。実行委員をつかまえては「今年の総会は最高じゃったの～！」と感謝する人なども多く、みんな一様に満足した顔でした。この瞬間、「やっと終わった！」という安堵感と「やって良かった！」という感激の入り交じった感情に襲われたのは、私だけではなく、殆どの実行委員であろうと思います。今年の総会は、自画自賛になりますが、大成功でした。

前述したように実行委員会の一致団結等がこの総会の成功につながったことは確かなことですが、

忘れてならないのは、この実行委員会を多くの先輩を始めとする皆さんが暖かく支え、励まして下さったことです。そのことは、我々が自信を持てないときや不安に感じたときの精神的な支えになりました。ここに、多くの先輩を始めとする皆さんのご支援とご協力に心から感謝します。一方、実行委員の多くは、このような作業を通じて今まで以上に修道卒業生としての人のつながりを感じることが出来たのではないかと思います。特に、一年間実行委員会の中で培われた、年次を超えた修道の仲間としての交流は、実行委員それぞれの大きな財産になったのではないかとも感じています。

最後に、我々、修道学園同窓会関東支部及び関東に在住する修道卒業生は、このような総会等を通じて、母校・修道への感謝と愛を体感し、母校への恩返しと現役の修道生へのご支援を誓い合っていますことを強調して、この報告の筆を置きます。

なお、この総会の模様や修道学園同窓会関東支部の活動については、関東支部のＨＰ（http:／／www.shudo-k.org／）にも掲載していますので、一度ご覧になって下さい。

校歌斉唱

支部だより

第51回(平成19年度)修道医会の開催報告

井　内　康　輝（高校19）

平成19年7月21日(土)　通常総会及び懇親会　於：広島全日空ホテル

修道医会は昨年、創立50周年を迎え、盛大な記念祝賀会を行いました。会員数もおよそ1,000名に達し、今後とも広島県の医療の中核をにない、広島大学を中心とした医学・医療の発展のために尽力したいと考えているところです。

今年度は、通常総会及び懇親会を平成19年7月21日（土）に広島全日空ホテルにて開催しました。まず午後4時半から評議員会を行い、第9回学術奨励賞、第9回社会功労賞の受賞者の審議と、今年で任期満了となる碓井静照会長（高校8回卒）の後任会長及び役員についての協議を行いました。次いで午後5時からの総会では、平成18年度の決算報告及び平成19年度の予算案が承認され、役員改選については別紙の如く、会長として神辺眞之（高校13回卒、現広島市立舟入病院長）、副会長として山肩俊晴（高校14回卒）、井内康輝（高校19回卒）の各氏が選任されました。他の役員についても神辺次期会長の指名で別紙の如く決定されました。会員の慶事としては、戸井雅和先生（高校28回卒）が京都大学外科学教授、

会長交代

吉田和弘先生（高校29回卒）が岐阜大学外科学教授、相模浩二先生（高校18回卒）が国立病院機構東広島医療センター病院長に就任されたことが報告されました。

第９回学術奨励賞は、高校40回卒の熊谷元先生（現厚生連廣島総合病院呼吸器外科）に贈呈されました。受賞の対象となった論文は“Evoked spinal cord potentials monitored at thraco-abdominal region after trans-intercostal stimulation”（Hiroshima Journal of Medical Sciences 55:55-57, 2006に掲載）であり、胸腹部大動脈瘤の手術の合併症である対麻痺を回避するために、簡便に脊髄誘発電位を測定するシステムを開発したもので、臨床的な有用性が高く評価されます。第9回社会功労賞は、旧中25回卒の林剛吉先生（市内三川町、林病院）が受賞されました。林先生は昭和14年に大阪高等医学専門学校をご卒業後、海軍軍医少佐をへて、広島赤十字病院、岡山鉄道病院などに勤務され、昭和39年から林医院、昭和47年から林病院にて、地域医療に永く貢献されてこられました。

今年度の特別講演は高校26回卒で、平成18年２月、広島大学医学部第一外科助教授から兵庫医科大学感染制御学の教授になられた竹末芳生先生から“外科医による感染制御への挑戦”という演題名でお話しいただきました。竹末先生は外科手術につきまとう感染症の防御を専門とされ、この分野の日本のリーダー的存在です。新しい概念での感染防御のお話は会員を裨益するところ大でありました。

午後６時半から懇親会に移り、来賓の林正夫広島県議会議長と田原俊典修道中・高等学校長からお話をいただきました。とくに田原校長からは、元気になりつつある修道学園の現状をご報告いただき、会員一同大いに喜んだところです。また、今回特別ゲストとしてお招きした加藤友三郎翁銅像復元会の田辺良平代表からは、母校修道の先輩で内閣総理大臣を務めた加藤友三郎氏を紹介するビデオを見せていただき、銅像復元のための協力を要請されました。その他に招待した学生会員（広島大学医学部医学科学生）の紹介等を行い、懇親の実も大いに上がりました。最後に修道の校歌を高らかに合唱し、万歳三唱で締めくくりました。78名の修道健児の意気盛んなところを見ることができた楽しい会であったと思います。

田原校長挨拶

林理事長挨拶

校歌斉唱

修　道　医　会

会　長	神辺眞之	(高校13回卒)	広島市立舟入病院（院長）
副会長	山肩俊晴	(高校14回卒)	広島市医師会（副会長）
	井内康輝	(高校19回卒)	広島大学病理学（教授）（事務局長併任）
監　事	原田　廉	(高校13回卒)	広島市中区医師会（会長）
	土肥博雄	(高校16回卒)	広島赤十字・原爆病院（院長）
幹　事	森田博方	(高校14回卒)	開業（精神科）
	桑原正雄	(高校17回卒)	県立広島病院総合診療科（部長）
	岩森　洋	(高校18回卒)	中電病院（院長）
	松野　堅	(高校20回卒)	開業（内科）
	永井宣隆	(高校22回卒)	安佐市民病院産婦人科
	牛尾剛士	(高校25回卒)	開業（内科）
	片岡　健	(高校26回卒)	広島大学保健学科（教授）
	佐藤修治	(高校26回卒)	開業（耳鼻科）
	伊藤有峰	(高校29回卒)	(医) 健康倶楽部健診クリニック
	伊達秀二	(高校35回卒)	済生会広島病院放射線科
	宮本和明	(高校35回卒)	呉医療センター・中国がんセンター
	北村直幸	(高校39回卒)	(株) エムネス（遠隔画像診断センター）
	中前稔生	(高校47回卒)	広島大学整形外科学
顧　問	佐々木甲子郎	(旧中33回卒)	広島市民病院（前事業管理者）
	岩森　茂	(旧中36回卒)	安佐市民病院（名誉院長）
	伊達昌英	(旧中36回卒)	開業（放射線科・胃腸科）
	盛生倫夫	(高校２回卒)	中国労災病院（名誉院長・顧問） 大君浜井病院（名誉病院長）
	折免昭雄	(高校６回卒)	
	土肥雪彦	(高校６回卒)	土谷総合病院
	茶幡隆之	(高校７回卒)	開業（皮膚・泌尿器科）
	碓井静照	(高校８回卒)	広島県医師会（会長）
	大濱紘三	(高校12回卒)	県立広島病院（院長）

事務局　〒734-8551　広島市南区霞1-2-3
広島大学大学院医歯薬学総合研究科病理学内
（担当：井内康輝）

同期会報告

修道中学入学70周年を祝う

平成19年４月３日
北　川　洸太郎（旧中33）

修道中学入学70周年、卒業65周年を記念して我等「三三会」の同期会は４月３日、桜花爛漫の中を広島市南区本浦町の【半べえ庭園】本館において開催いたしました。当日は精進の良い者の集まりだけあって朝からの青空で桜も満開、久しぶりに会った旧友の心も満開の一日であった。我々同期の卒業生は約196名、内鬼籍に入った者と行方不明者合わせて約131名、生存者約65名の中で自分か妻が病気や介護で欠席したもの約41名、結局当日出席したものは23名でした。しかし遠路岩手県北上市や名古屋市からはせ参じた者もあって顔が判らないほどの疎遠の友人もあり83歳という年を感じる同期会でありました。

初めに遠来の竹下、中野両者より挨拶あってから楽しい歓談が続くうち、大島俊志君演ずる「荒城の月」のハーモニカ独奏に続き「春高楼の花の宴....」と全員で合唱したのは当に窓外の満開の桜と色も心も通じ合った一瞬でありましたし70年前に入学したときの少年の希望と夢を思い出した瞬間でありました。

暫くして余興でアンケートを行うことになり、１）毎日２～３キロは歩いている。２）毎日晩酌する。３）１年に何回かはゴルフをする。に対しては23名中２～３名しか手が挙がらず　４）月に２～３回は病院に行くでは15名が手が挙がった。

我々同僚は何もしないで病院にだけは行き、健康を保ち長生きをしていると言う常識に反する結果になったことは実に興味深い実験であった。最後に校歌を歌い、来年の再会を約して解散となった。

城田　宮田　景山　俵　岡田　桜井　上垣内　角田　東　磯谷　中野　日域　竹下　山道　森川　迫田　木下　板林　大田　今田　佐々木　大島　北川

同期会報告

「旧中37・38回同期会」

平成19年6月17日(日)　全日空ホテル

佐々木　博（旧中38）

昭和17年（1942）入学の私たちも、喜寿が過ぎて傘寿の山に登りつつある。

最近、各種会合に出席すると、長老扱いで、乾杯係を仰せつかる。

私たちの同期会は、平成7年から毎年開催しているので昨年、隔年開催を提案したところ、元気な間は出席したいと毎年開催がきまった。

約70名の旧友に案内したところ、33名が出席した。脳硬塞で療養中のＳ君が、４年ぶりに出席して、友人の介助を受けながら、再会の喜びにひたっていた。

弱った姿を見せたくないのに、世話人として、熱い思いにかられた。

乾杯は、３年ぶりに来た名古屋の益本君が音頭をとり岡山の勝村君（元川崎医大学長）のテーブルには医療相談に集まっていた。

各テーブルの談笑は、料理に手をつけるのも忘れて続いた。

三本締めは、千葉から来た槙田君（茜会代表）が来年の再会を期してしめくくった。

「健康は、自分に贈ることのできる
最高のプレゼントである」

河野　河本
田中　島田
木村(と)
田村
杉井　山内
中村
新宅　砂堀
勝村
浜田　萬城
槙田
山田(ひ)　木本
古西
佐伯　天野
大原
山田(よ)　粟村
横島
益本　三浦
冬城
深崎　林
西原
木村(し)
佐々木　石川

同期会報告

四期会総会報告

平成19年６月９日　於：広島アンデルセン
河野富士雄（高校４）

「四期会」は新制中学２回卒と高校４回卒の集まりです。昭和21年４月、被爆後最初の入学生として旧制度の修道中学校に入学し、学制改革で新制中学校生となり、中学卒業で他校に転じた者、そのまま修道高校に進んだ者、同世代の人はどの学校も同じですが、戦後の混乱期に様々な学校生活を送りました。そして今年は高校卒業後55年、毎年開催するようになって第35回目の同期会が６月９日、広島アンデルセンで開催され、川野先生を囲んだ教え子38名が賑やかに歓を尽くしました。病気療養中でやむをえず欠席の友人を気遣う人、大病を克服して出席し体験談を語る人、年齢がら、どうしても健康問題が主な話題になってしまいます。「来年もぜひ会おう」と決意表明して散会となりました。

竹中　花輪　仙波
伴　木下　門　菊田
上野（広）　中川　酒井
伊藤　中村　火浦
行友
原田　奥本　川野先生
上野（浄）
大島　加納　中能
岡野
大下　合原　斎藤
三吉
浜住　土井　河野
大已
和田　重富
三浦
梅田　小野
平見
住本　内藤
谷口

山田十竹先生の日記を読む（その二）　特別寄稿

「十竹軒日録」

（明治４年８月の記述　旧藩主引き留めの動きなどを中心に）

修道学園史研究会　畠　眞　實（元校長・高校７回）

前号に続いて今回は「十竹軒日録」の中から明治４年８月の日記の一部を紹介したい。

この「十竹軒日録」の表紙に「自　慶應（改元明治）戊辰八朔　」と書かれている。この日記は平成16年５月に山田十竹先生の孫に当たられる山田弘秋氏から修道中学校・修道高等学校へ寄贈された５冊のうちの一冊である。時間的には、先に紹介した「乙丑日記」や従来から学校で所蔵していた「丙寅日記」に次ぐ年代のものである。日記に書かれている月日は、明治元年の１月から12月、明治２年１月から４月３日までと明治４年８月４日から９月14日までで、明治３年の記述は抜けている。

今回紹介するのは明治４年８月４日から８月23日までの部分である。この部分を特に取り上げたのは、山田養吉先生が広島藩の大一揆（武一騒動とも言われている）に遭遇された記述があるからである。明治４年７月14日に太政官政府から廃藩置県が布告され、人々の間に大きな動揺が起こる。とりわけ下層農民にとっては苛酷な生活を強いられるのではなかろうかと不安が募っていく。そうした中新政府の命令で旧藩主が東京に移り住もうとされる。その旧藩主淺野長訓公を引き留めようとする動きを契機として県全体の一揆へと発展していった。そうした農民たちを鎮撫するために山田養吉先生らは県からの命令を受けて、廻村して説諭に当たられる。そうした内容が述べられているのである。その意味でその時代の貴重な資料の一つと言えるであろう。

＊日記については、日付に従って、先に「書き下し」を、ついで【語注】・「口語訳」・【参考】という順で列記した。

＊【参考】としてこの日記の内容に関連した事項についての説明のうち、出典を特に示していないものは「芸藩志」による。

【参考】

★明治４年８月４日以前の動きについて簡単に示してみる。

（明治４年）

7.14　太政官（政府の役所）が廃藩置県の詔書を発す

7.15　淺野長勲（ながこと）藩知事免職。

7.18　淺野長勲、東京在住を命じられる。

7.20　淺野長勲、東京より説諭書を発する。

正二位様（淺野長勲）の直筆の写し（説諭書）

今般藩を廃し県と被成知事免職被仰付候御深意は　皇国之御爲諸藩一般之事に付広島而已之義与心得違疑惑等いたし候而者不相済義にて　若しや旧習旧情に泥み万々一不都合之所行有之候而者　皇国江対し恐入候事と相成るのみならず　我等是迄不及なから其方共引立　忠節相尽度志も空敷　相成候間　聊旧来之恩義を思呉候はゝ益朝旨遵奉御趣意貫徹候様精々相心掛可申只管頼入候　将又今般御改制之義者万民御撫育之御趣意に候間　何れに茂迷を不生奉報天恩候義専一に相心得可申候事

七月廿日　正二位淺野長勲

広島県御管内　士族

卒　御中

【大意】　廃藩置県や免官が広島藩だけのことではなく、諸藩一般のことであり、朝廷の意向を最も大切に考え、皇国に対して決して心得違いをしないように。

1871.7.24　広島城内に旧藩士を集め広島藩が広島県となることを伝達。

1871.7.25　淺野長訓（ながみち）と長勲夫人が８／４東京へ出発と発表される。

【日記】

明治四年　辛未（かのとひつじ）（1871）

八月四日　竹館・松園二公、及び二位公夫人、将に東京に移らんとす。寅の刻、余猶褥（しとね）に有り。門外を走り過ぐる者曰く、起きよ、起きよ、と。頃（けい）之（し）復た走り過ぐる者、呼（さけ）びて曰く、皆出でよ、皆出でよ、と。余驚きて起く。塾生某、報じて曰く、民庶（みんしょ）竹館公の擁留を謀る、と。余乃ち某某を訪ね、告諭の策を説く。

【語注】

・竹館公　淺野長訓のこと。竹の丸様ともいわれた。　・松園公　淺野懋績（としつぐ）・内記とも呼ばれていた。　長訓の弟。　・二位公　淺野長勲公　・頃之（けいし）　しばらくして　・塾生　欄外上に「余時に私塾白島に開く」の記述あり　・告諭　広く民衆に告げ諭す。　・民庶（みんしょ）　民衆

【口語訳】

明治四年　辛未（かのとひつじ）（1871）

●八月四日　竹館公（浅野長訓（ながみち））松園（浅野懋績（としつぐ））二公及び二位公（浅野長勲）夫人らが東京に移住されようとした。午前四時ごろ、私はまだ蒲団の中にいた。 門の外を走り過ぎる者がいる。その者たちが起きろ、起きろと叫ぶ。しばらくしてまた走り過ぎる者がいる。　皆出てみよ。　皆出てみよと叫ぶ。私は驚いて起きる。某塾生が知らせて言うには、　民衆が竹館公の上京を抑え留めようと謀っている、と。そこで、某を訪ねる。そして告諭の方策を説明する。

【参考】

「老公の東京移住の報を聞くや芸備十六郡の人民は一時に動揺して各社寺に聚合して協議を為し、我等三百年来に恵の恩沢を蒙りたる藩主公は今や遠く江戸に去らんとせらるるに際し、是れを傍観して留止せずんばあるべからずとて山県郡を初めとして各郡の人民は陸続きとして広島に向て集まる。皆斗米を袋にし、紙幣をて包みて、之を献呈し以て永訣の意を表すると称し、露座（ろざ）して発駕を

待てり。県庁にてハ其状況を諜知し、其非常の事あらん事を慮り、路傍を警戒して、其発駕に支障ながらしめんと謀れり。本日正午城内竹館の門は開き、老公の駕は門を出ること数尺なり。此の時城内に填咽せる人民は皆道路を遮塞し俯伏こ哭して偏に発駕を中止し、暫く居住あらん事を哀願痛訴して薨然たり。」（「芸藩志」）

＊長訓一行の旅程予定

竹之丸館と三の丸（淺野長訓公以外の淺野家一族が居住していた）を正午に出立　→　南御門　→　中堀をわたり　→　一丁目筋を南へ　→　一丁目御門　→　外堀をわたる　→　南へ進み右折　→　西国街道を西へ　→　元安橋　→　中島本町　→　西国街道を左に折れて南へ　→　水主町の乗船場　→　御座船に乗船　→　広島湾　→　宇品沖に停泊中の本船に乗り移る　→　瀬戸内海を海路で兵庫湊（神戸市）→　船を乗り換えて海路横浜へ

（金谷俊則「武一騒動」による）

五日　又、某某を訪ぬ。

●口語訳　五日　又某を訪ねる。そこでも告諭の方策を説く。

六日　酉の刻武井参事書を遣して、曰く、談ずべき事有り。弊宅に至るを請う。余一瞥して曰く、告諭なり、と。武井氏至る。至る者某々廿許の人。寅の刻に至り、参事始めて余輩に面して告諭の条を説き、且つ竹館公の書を各人に付す。書に曰く、

再昨、東京に移らんと欲し、既に上途す。民庶道途を塞ぎ、駕前に伏し、哀訴抑留し、進むべからず。上途苟も遅るれば、朝命を奉ぜざるに似たり。誠に惶れ、誠に懼る。進退実に谷まれり。我が家の不幸此れより甚しきは莫し。県庁諸人に嘱す。之を鎮めよ、之を諭せよ、再び上途の日、抑留莫からしめよ、厚く嘱す。

淺野從四位

広島県庁諸人

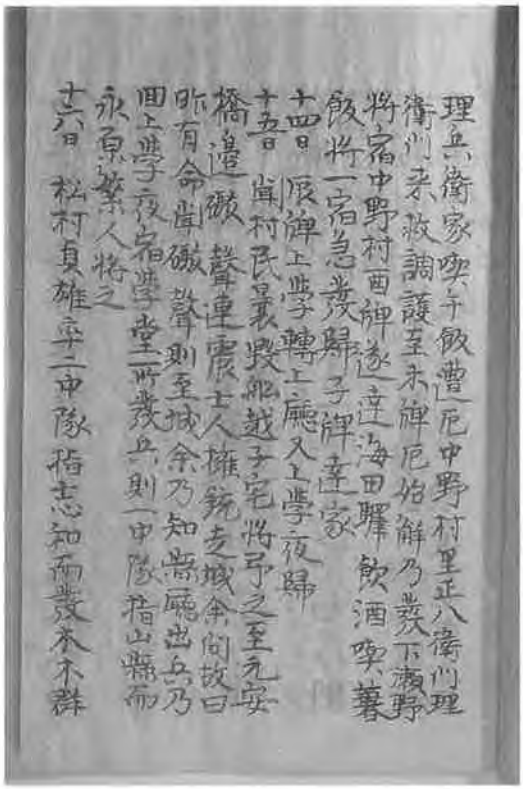
命を受けて帰る。萱堂曰く、何ぞ遅き、と。曰く、入郡の命を受けて寺尾・木本二生之を為す事

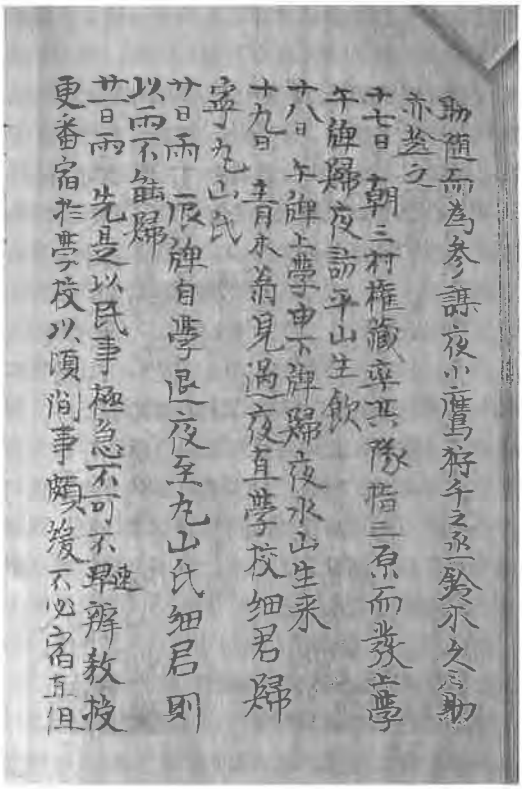
を発議すも決せず。明早、将に発たんとす。捨吉、其れ如何。蓋し家僕捨吉、五、六日前、足を痛め、健歩すること能わず。乃ち、松島生家僕を借らんと欲す。僕、方に帰省せんとす。永田生家僕を借らんと欲す。家僕既に安藤五郎に随いて発つ。星野生の門人を借らんと欲す。装いて僕様に為す。曰く良平。東上刀匕の事劇し。二門人一を欠くべかず。乃ち、小鷹狩氏の家僕を借らんと乞う。始めて肯んぜらる。周旋の間、東方既に白む。僕の名、六郎なり。

【語注】

・武井参事　武井澄　・弊宅　あばらや　自分の家を謙遜して言う。　・一瞥　ちらっと見る　・哀訴　嘆き訴える　・苟も　仮にも　・朝命　政府の命令　・惶れ　心が動揺して落ち着かない　・懼る　びくびくする　・嘱す　いいつける　・従四位　淺野長訓のこと　・命　廻村して騒ぎ立てている民衆に説諭せよとの命令。　・萱堂　母のこと。　昔、中国で、母は北の座敷を居間とし、萱草（わすれぐさ）植えたことからこのように言う。　・発議　議論する　・入郡の命　先の「命」に同じ　・寺尾・木本二生　彼らも入郡の命を受けている。　・蓋し　そもそも　・家僕　家の使用人　・健歩する　さっさと歩く　・松島生　山田養吉の日記しばしば　に出てくる。精しくは把握せず。・永田生　精しくは把握せず　・安藤五郎　三次、恵蘇郡へ廻村の命が下っている。　・星野生　星野良平　・刀匕の事　刀と匕首。　斬った、はったの事件　・小鷹狩氏　小鷹狩千之丞　・抑留　無理に引き留める　・周旋　あれこれと交渉する。

●口語訳　六日　午後六時ごろ、武井参事が書簡を送ってきて、それには相談しなければならないことがあるので拙宅まで来て欲しいと書かれている。私はこの書簡を一瞥して、これは告諭に関することだと言う。武井氏の家に行く。やって来たものは誰彼合わせて廿人ばかりであった。午前四時ごろ、参事が始めてわれらに面会して告諭のことを説明した。そして竹舘公の書簡を各人に手渡した。





書簡には、「おととい（八月四日）東京に移住しようとした。上京の途につこうとすると民衆が行こうとする道を塞ぎ，駕篭の前にうつ伏し、行かないで欲しいと嘆き訴え、無理にひきとめて進むことができない。上京がかりにも遅れるということになれば、政府の命令を謹んでお受けしないのと同じようなことになる。そのことで誠に心が動揺して落ち着かず、不安な思いである。どのようにしてよいか全く窮してしまった。我が家の不幸はこれより甚だしいことはない。縣廳諸人に頼む。これらの群衆を鎮め、かれらを諭して欲しい。再び上京の日に抑留することがないように致せ。しっかりと頼みおく。

淺野従四位（長訓）

広島県庁諸人」

令令（説諭のため郡廻りに行けということ）を受けて帰る。

母が「何と遅いことよ」と言う。私は「説諭のために郡廻りに行けとの命令を受け、寺尾（章六）・木本（群介）［両名とも同じく命令を受けている］二君といろいろ意見を出し合っていたのだ。」と答えた。命令された事についてあれこれと話したが結論に達しなかった。明朝早く出発しようと思う。

捨吉はいかがであろう。そもそも家僕、捨吉は五、六日前に足を痛めてまともに歩くことができない。そこで、松島君の家僕を借りようと思ったが、彼はちょうど帰省しようとしていた。そこで永田君の家僕を借りようとしたが、既に安藤五郎（彼も命令を受けて三次方面に派遣されることになった）に従って出発したという。星野君の門人を借り、僕のように装わせようと思ったが、（星野）良平が言うには「東に向かって行くのは、刃傷沙汰がはげしく危険だ。二人の門人どの一人をも失う訳にはいかないのだ。」と。そこで小鷹狩氏の家僕を借りたいとお願いしたところ、始めて承知してもらえた。あれこれと交渉している内に既に東の空が白んできた。彼を借り受けることになった。僕の名は六郎というのである。

【参考】

8.5～8.6　遠隔の郡部の民衆、続々と城下に集ま

更番在家以備事急
廿二日 終日在家 村上五郎来 鳴 諸生入余門
小川洋作 三村八郎来
廿三日 入郡以後至今日始下帷 舩 越子寄
番 佛戰爭 話 於 瀬日置三子 共 余渡六之介
所著
廿四日 雨 講軌範 之 勝田澤藏 来 聽 夜 共 諸子
飲
廿五日 雨 朝方 喫飯 兵山雅之助 来 昔 買宅事
成
廿六日 雨風 前藩 縣 以二七為休暇 自今日以

り、前藩主（長訓）の引き留めを主張して退去せず。県庁、農民説諭のため官員24名を各郡に派遣。寺田少属農務担当の下級役人らを御調・甲奴に派遣。

説諭のため派遣された役人24名

＊賀茂・豊田	両郡	**永濱・修助・平川静一郎 森元・滝七**
＊安芸・沼田	両郡	河原栄之助・中尾勝太郎 佐々木　操
＊御調・甲奴	両郡	**佐藤・守真・波多野八郎 山田・養吉**
＊世羅・三谿	両郡	池田　栄・山口　憲蔵 長尾新左衛門
＊山県郡		栗原他人三郎・竹内丈太郎 寺尾　章六
＊奴可・三上 三次・恵蘇	四郡	片岡多一郎・**木本・群介 安藤・五郎**
＊高田・高宮	両郡	堀禎　次郎・村上三郎二 松尾清太郎

・**網掛け**をした人名は日記に出ている。

七日　乃ち五合の酒を喫し、乃ち上途し、海田駅に至る。波多野生既に猫屋に在り。平川・永濱・森元三氏又在り。既にして三氏皆発つ。余、佐藤、某氏を待ち、至る。巳の刻、某至る。乃ち茶飯を喫し上途す。奥田海（奥海田の誤記か）に至る。鼓鼕々と鐘殷々たり。輿丁相語りて曰く、昨日の会、某亦至るか、と。余問う、会とは何事ぞ、と。曰く、竹館公を留めんと欲せん、と。下瀬野に至り、亦鼓声を聞く。余何の鼓ぞ、と問う。曰く、竹館公留めんと欲し、且つ東京に至るを擁帰せんと欲す、と。知事公曰く、費用許多、銭無きを如何せん、と。曰く、農人富有り、貧有り。富人を以て貧人を資く。東京に至るも亦可なり。且つ公苟も帰らば、農人銭盡竭も可なり。四日市に至る。倉本良蔵の家に宿す。

【語注】

・海田駅　広島から東に向けて最初の宿駅。

・波多野生　波多野八郎　　・猫屋　旅籠か？

・永濱・森元三氏　説諭に行くよう命じられている人たち。　・鼓鼕々　太鼓の音がどんどんと鳴り響くさま。　鐘殷々たり　鐘の音が鳴り響く様さま。　・輿丁　篭を担ぐ人　　・盡竭　つきはてる　　・四日市　現在の東広島市西条　宿駅。

●口語訳　七日　五合の酒を飲み、そうして（廻村の）途につく。海田の宿に着く。波多野君は既に猫屋にいた。平川（修助）・永濱（静一郎）・森元（滝七）の三氏（この三人は、賀茂・豊田両郡に派遣されることになっていた）は皆出発し、わたしは佐藤氏某氏を待っていると佐藤氏が到着した。午前十時某氏が到着する。そこで茶漬けを食べ、途に就く。奥田海（奥海田の誤記か）に着く。太鼓の音がドンドンと、鐘がいんいんと響く。駕篭を担ぐ者同士話している。「昨日の集まりにまた行かれるのか。」と。わたしは「集まりとはなにごとなのか。」と尋ねる。竹館公（淺野長訓）を引き留めようとするものだ。」と言う。下瀬野に行き着くとまたも太鼓の音が聞こえてくる。「何のための太鼓なのか。」とまたわたしは尋ねる。竹館公を広島に留まって欲しいと願い、その上東京に行こうとされる

のを取り囲んで帰ろうとするものだ。」と言う。知事公は「費用がたくさんかかる、お金が無いのをどうしたものか。百姓には富める者、貧しい者がいる。富める者が貧しい者を助ける。東京に行くのもよい。また公が仮にも館に帰るようであれば、百姓の金をすべて使い果たす事になる。それもまたよいであろう。四日市に到着する。宿は倉本良蔵の家である。

【参考】

8.7　長訓は朝命に反することを憂慮。人民への説諭を親書で依頼。親書を受け県庁は県下各郡を24名の官員に巡回説諭させるため説諭書を下した。

八日　雨　卯の下刻、四日市を発つ。輿中詩成る。

書きて同行の者に示して曰く、
王事唯だ就を要む　親と疎とを論ぜず
朋儔相酒を買い　主僕互いに輿に乗り
笑を帯びて佳稲を看　心関わりて破廬を顧みる
宇県久しく騒擾し　黔首果たして何如

同行の者、曰く、佐藤守真、曰く、波多野八郎、曰く、寺田生十郎即ち亦た加わう。将に新庄に著かんとし、午飯を喫す。後、柴田千太郎農務局吏、郡より帰す者、拉して新庄に至る。郡中の情態を問う。又新庄を発つ。酉の刻、柞原に達す。宿、番所に近し。

【語注】

・王事　政治　就を要む　成就することを求める。・朋儔　仲間　・佳稲　良く実った稲・破廬　そまつないおり　・宇県　天下・黔首　黒い頭。冠をかぶらず黒髪をあらわにしているところから、人民の意味。　・何如　どのように判断するだろうか。　・佐藤守真　大属。農務係2石　・波多野八郎　監察。10.5石・寺田生十郎　少属10.5石。一般的には清十郎とある。　・拉して　連れていく　・新庄　賀茂郡。現在竹原市　・柞原　「和名抄」に柞原と出ている。三原の古名。

●口語訳　八日 雨　午前六時過ぎ四日市を出発。駕篭の中で漢詩ができたので、記して同行の者に示す。詩とは次のようなものである。

「政治というものは、ただ現実の成果を求めるものだ。自分にとって切実なものか、そうでないかの問題ではない。仲間同士互いに酒を買い、主人も僕も互いに篭に乗っている。笑みをたたえながら良く実った稲を見、あばら屋を顧みては心を痛める。天下の騒動に加わっている民衆は果たしてどのように思っているであろうか。」

同行の者、佐藤守真・波多野八郎、寺田生十郎もまた加わる。もう少しで新庄（賀茂郡）に到着するというところで、昼ご飯を食べる。その後、柴田千太郎、彼は農務局の役人で、郡から帰って来た者なのだが、その彼をひき連れて新庄に到着した。そこで郡の様子を尋ね、また新庄を出発した。午後六時、柞原に達した。宿は番所に近い。

【参考】

8.8　説諭困難と暴動勃発を警戒して24名の官員を呼び戻す。政府に事態を報告。

九日　御調郡理正及び柞原里正を招致し、説諭二回。暮、辻直太郎至る。蓋し直太郎尾道勤番所に視事する者なり。守真之を招致す。蓋し、初め守真、八郎と余と柞原より三道に分かれ告諭せんと欲するも、中間益之、生十郎、直太郎を以て乃ち将に五道に分かれて告諭せんとす。余則ち将に因島・向島に向かわんとするなり。

【語注】

・理正　庄屋・村長　・辻直太郎　権少属・農務係(10.5石)　・視事する　職務をまじめにおこなう。　・中間益之　精しくは把握せず。

●口語訳　九日　御調郡の里正を招致す。柞原(三原)の里正もやってくる。説諭すること二回。暮れ方、辻直太郎がやって来た。直太郎は尾道勤番所に勤務している者である。(佐藤)守真がこの者を招致したのである。これは、思うに、初め(佐藤)守真は、(波多野)八郎とわたしとで柞原(三原)より道を分かれ、三つのルートで、告諭しょうと思っていたのであろう、そうであったが、今は中間益之、(寺田)生十郎、(辻)直太郎を加えて、五ルートに説諭することを分けてやろうとしている。それでわたしはこれから因島・向島に向かおうとするのである。

【参考】

8.9　山県郡壬生村庄屋宅で説諭中の官員２名が襲撃され重傷を負う。広島城下でも朝令の制札を引き倒し、豪商に打ち壊しをかける。

＊上記の事件が起こった９日を境として、事態は旧藩主引き留めから一揆へと展開していく。

十日　辰の刻柞原を発ち、上船す。午の刻因島重井村、村上八太郎の家に達す。里正を招致す。五人組至る。申の刻、寺堂に就き、説諭す。会する者百許人。夜、恒次郎・八太郎を呼び、小酌す。恒次郎は向島の里正なり。余の説諭の事件に供する者なり。

【語注】

・就き　その場所まで行く　　・小酌す　小宴を開く　　・供する　役立つようにする

●口語訳　十日　午前８時ごろ 柞原（三原）を出発し、船に乗る。正午因島、重井村、村上八太郎家に到着した。里正を招致する。五人組もやって来た。午後４時ごろ 寺堂に行き説諭にする。集まって来た者は百人ばかりである。夜、恒次郎・八太郎を呼び、小宴を開く。恒次郎は向島の里正である。わたしの説諭の事について力を貸してくれる者である。

十一日　卯の刻前、余猶蓐に在り。恒次郎即ち波多野生の書を持ちて来たる。之を披(ひら)くに中に参事の書有り。曰く、

村民県城に集まり説論を聴きて去る者、去らざる者有り。竹館公大いに之を憂い、東徙(とうし)遅延す。故に早く帰れ。

乃ち辰の刻上船す。風順にして帆飽く。巳の刻已(すでに)に柞原に達す。守真・生十郎亦た応(まさ)に到るべし。而るに到らず。終日之を待つ。山口実蔵を訪ぬ。実蔵余の同僚なり。広島より来たり、諸生者を督す。

【語注】

・東徙(とうし)　徙は、「うつる」　つまり、ここでは東京へうつることを言う。　　・帆飽く　帆に風を一杯に受ける。

●口語訳　十一日　午前６時ごろ、わたしはまだ蒲団の中にいた。恒次郎が波多野君の書簡を持ってくる。これを開いてみると中に参事の書簡があって、「村民が県庁に集まり、説論を聴き入れて立ち去る者もいるし、納得せずに去らない者もいる。竹館公（長訓）はこの事態を大いに憂慮して、上京を延期された。だから広島に早く帰ってくるがいい。」と書かれていた。そこで午前八時ごろ上船した。順風で帆にいっぱい風を受け、午前十時にはすでに柞原（三原）に着いた。（佐藤）守真、（寺田）生十郎もまたおそらく帰着するはずであるのに、帰ってこない。終日彼らを待つ。山口実蔵、実蔵はわたしの同僚である、彼を訪ねた。広島よりこの日、やってきて諸生を監督するものである。

【参考】

8.11 城下の数千の領民が城内に進入し、歎願書（武一起草）を提出。多くは退散。　山県郡大塚村（現大朝町）高野村（現芸北町）の割庄屋宅打ち壊しに遭う。　翌日には郡用・村用の書類が焼かれ大塚村割庄屋宅は全焼、有田村の割庄屋も打ち壊しに遭う。大手町　三村屋来助　豊島屋（豪商）桑原儀三郎（本家）・桑原秀太郎（分家）、上流川　広島県小参事　小川忠順宅　舟入村　船越洋之助(衛)宅など打ち壊す。

この日、「乍恐奉建言候（おそれながら建言奉り候）」　御藩内　十六郡百姓共　芸備御藩内百姓共不残(のこらず)

末(ひつじ)　八月十一日

御城御出勤　御役衆中様

という嘆願書が提出された。この起草者が山県郡有田村武一（武一郎とも）である。

歎願書の内容をごく簡単に言えば、「数十代にもわたって藩の政治をなさった長勲公にそのまま政事をやっていただきたい。」というものである。もう少し歎願書の内容を紹介すると「今回長訓公の東京に上られるに際して駕篭の前に立ち塞がって押し留めようとしたのは、愚昧な百姓達が一図に思い立ち、藩主の旧恩を思い、ちょうど赤子が母を慕うような気持ちで行動したことである。『御違勅に相当り申候哉不奉存候得共』

(ごいちょくにあいあたりもうすやもぞんじたてまつらずそうらえども　・大意：政府の命令には背くことになるやも知れないことも承知し得ないで［国の一大事と思い、嘆願申し上げるのです］）というように述べている。この『御違勅に相当り申候哉不奉存候得共』という文言に、県当局は政府に対して極めて恐れをなし、誰かを首謀者として処刑しなければと考えたようである、と言われている。

十二日　雨　朝柞原を発つ。途、杉江貞馬を訪ぬ。暮、四日市に達す。宿の主、村民より広島参事宅、新庄里正居を毀(こぼ)つを聴く。

【語注】

・杉江貞馬　山田養吉の日記の他の箇所にも名が見える。詳細は未詳。

●口語訳　十二日　雨　朝　柞原（三原）を出発する。途中杉江貞馬を訪ねた。夕暮れに四日市（西条）に到着する。宿の主人は村民から広島の参事宅、新庄の里正の住居が打ち壊しにあったと聴いていた。

【参考】

8.12　広島城下で数百の郡民は玄関口の「菊の御紋」の官幕を除去し、暴動化。世羅郡では甲山地方7か村郡民が出張官吏（後藤兵之助）の宿所に押し寄せ切腹させる。

十三日　今日家に帰るを以て早く発つ。巳の刻、下瀬野里正理兵衛の家に達す。午飯を喫し、厄に遭う。中野村里正八右衛門・理衛門救いに来たり、護りを調う。未の刻に至り、厄始めて解く。乃ち下瀬野を発ち、将に中野村に宿さんとす。酉の刻、遂に海田駅に達す。酒を飲み、暮飯を喫す。将に一宿急ぎ発ち帰る。子の刻家に達す。

●口語訳　十三日　今日、家に帰るというので早朝出発した。午前十時ごろ、下瀬野里正、里兵衛の家に着いた。昼食を済ませてから厄難に遭う。中野村の里正、八右衛門、里衛門が救助に駆けつけて警護の態勢を整えてくれた。午後二時ごろになって厄難からやっと解放された。下瀬野を発ち、中野村で宿をとろうとして結局午後六時ごろやっと海田の宿に到着した。酒を飲み、夕食をとって、（家までは）あと一宿の行程なので急いで出発する。午前零時ごろ家に到着する。

【参考】1　「厄に遭う」について

「山田十竹先生履歴書」の中に記されている、この日の有様を紹介しておく。

「十三日、下瀬野里正理兵衛の家に到着し、昼ご飯を食べ終わる。門外に人の声が喧しく、鐘声もまた殷々として、人の振る舞いはといえば、その様子はただ騒擾としている。養吉等は庭の松に登って門外の様子を窺ってみると、竹鎗を持っている者が十四、五名である。養吉が二人に言うには、『郡民がわたしに求めるところがあるか。』と。すぐに理兵衛がやって来て、跪(ひざまず)いて言うには、『村民はあなた方を太政官だと思っている。』と言う。その言葉がまだ終わらないうちに、竹槍また鎌等を持って勝手口の庭に詰めかけ、門外には三百人くらいも押し寄せていた。養吉が二人に向かって言うことに、『我らがこのようなことに遭遇するのは、運の悪いことである。お互いに居(お)り合って子細を説き聞かせ、それで聞き入れられないとならば自殺も辞すものではない。だから、竹槍では刺殺してくれるなと頼むことにしよう。逃げ隠れれば、尋ね出して、いかなる目に遭わないとも知れない。』と言うところへ、理兵衛がまたやって来て、『あなた方にお目に掛かりたい。』と申します、と言うので、養吉は二人に向かって、『くれぐれも三人の身は百姓に任せるのが宜しい。』と申しながら勝手口へ出たところ、上がり口まで詰め寄って、一人が鎌を振り上げて言う。『おまえたちは太政官であって、この下瀬野を焼きに来たということじゃ。』と。養吉が言うことに、『決してさような者ではさらさらなく、斯様、しかじかの次第である。』と言えば、『嘘をつくと鎌がまわるぞ。』と言う。養吉が首を延べて、『斬るなら、斬れ、決して太政官ではありはしない。』と言ったところ、一人が側から鎌を持った者を抱き去ろうとするのを八郎が庭に下りて、『そこに置け。』と止めたけれども、ついに抱き去って言うことには『彼は酔っております。』と。ここにおいて、

この度の入郡の理由を話し、竹館公の書面を読み聞かせたことで心の中の疑いの固まりがすっかり解消したと思われ、群衆は漸く散っていった。」

＊山田養吉の日記には「厄難に遭う」と記されているが、この「山田十竹先生履歴書」の記述ではきわめて緊迫した様子を伝えている。他の郡に説諭に行った者が危害を加えられて命を落とすという事態に立ち至っていることを考えあわせると、命がけの説諭であったことが伺われる。

＊なお、「宮本愚翁日記抜粋」（宮本亥三二［使部農務附、25石・心学者］）に以下のように記されている。

「八月十四日昼、景山義太郎尾道より引き取掛ケ立寄、程無く出足候処、夕七半時過、辻直太郎殿、景山義太郎同道途中より引き返し、勤番所へ帰着あり、辻者昨朝尾道出立、新庄村に泊まりにて田万里村へ相越候途中、広島よりの報知飛脚に会し、大変につき船中或は他藩へまわりてなりと早々帰広致すべしとのとの事なり、然るに海田市より上瀬野村辺り迄は一騒の者共数千人群集の趣にて、佐藤殿・波多野殿・山田殿も途中にて建巻（とりかこまれ）、殊の外相困られ候由相聞候付、辻・景山殿直に船にて尾道へ引返に相成たり。」

【参考】　2

8.13　県当局、武力による暴動鎮圧を決定。城南門に大砲をすえる。部隊発砲により死者22名、負傷者４名。逃げ去る乱民の略奪を契機に十六郡中尽く乱民蜂起に至る。山県郡加計村の鉄山方出張所が襲撃され米を奪われ役人が縛られる。

＊百姓は宝という考えがあったが、ここにおいて百姓に銃口を向けたということは、大きな変化が見受けられる。

十四日　辰の刻、学に到る。転じて庁に上がる。又、家に達す。

●口語訳　十四日　午前八時ごろ、学校に出勤する。それから県庁に行く。その後再び学校に行き、夜帰宅する。

【参考】

8.14　三次郡（現双三郡）の一揆勢は郡内庄屋20軒を打ち壊し恵蘇郡に侵入。一揆は県北諸郡に及ぶ。

十五日　村民曩に船越子宅を毀つと聞き、将に之を弔せんと元安橋辺に至らんとす。礮声連震し、士人銃を擁して城に走る。余故を問う。曰く、昨、命有り。礮声を聞き則ち城に至る、と。余乃ち県庁の出兵を知る。乃ち回して学に上る。夜、学堂に宿す。発する所の兵即ち一中隊、山県を指して永原繁人之を将る。

●口語訳　十五日　村民から先ごろ船越氏宅が打ち壊しに遭ったと聞き、見舞いに行こうとして元安橋のあたまでやって来た。大砲の音が続けざまあたりを震わせて響きわたり、兵士が銃をかかえて城に向けて走って行く。そこでわたしが「どうしたのか。」と尋ねてみると、「昨日命令があった。大砲の音を聞いたので城に行こうとしているのだ。」と答えた。わたしは、それで県庁が出兵を命じたことを知った。そこで踵を返し、学校に行く。夜、学堂に宿直する。一中隊が山県郡を指して出発した。永原繁人がこれを指揮する。

【語注】

・船越　洋之介。若き日、山田養吉らと藩の実情を憂い、同志と共にたびたび集まっていた。維新後、衛と改める。のちに石川県知事、宮城県知事を務める。父の家が舟入村にあった。　・県庁の出兵　８月13日の項　参照　・一中隊　100人編成　・永原繁人　中隊長

【参考】

8.15　山県郡へ兵一大隊（600人）派遣。沼田郡から山県郡までの道筋で檄文を通達。三上郡の一揆勢庄原町へ集結。郡方へ鎮撫隊派遣。御調郡の一揆勢２万人は尾道へ向け、世羅郡の一揆勢７千人三原に向け群集し、尾道出張所の官員は広島に逃げ帰り、三原の官員「進退ここにきわまる」と。

十六日　松村貞雄、二中隊を率いて志和を指して発つ。木本群助随いて参謀と為る。夜、小鷹

狩千之丞・鈴木久之助亦之を趁(お)う。
・松村貞雄　中隊長　　・鈴木久之助　精しくは把握せず　　・趁(お)う　あとを追う
●口語訳　十六日　松村貞雄は二中隊を率いて志和に向けて出発した。木木（木本の誤記か）群助もこれに随って参謀となる。同夜、小鷹狩千之丞、鈴木久之助もこれを追う。

【参考】
8.16　県内東北部の諸郡に神機隊（農兵）を派遣

十七日　朝、三村権蔵其隊を率いて三原を指して発つ。学に上る。午の刻帰る。夜、平山生を訪ね、飲む。
【語注】
・三村権蔵　大隊長　　・平山生　精しくは把握せず。
●口語訳　十七日　朝、三村権蔵は自分の隊を率いて三原に向けて出発した。学校に行く。午後四時過ぎ、帰宅。夜、平山君を訪ねて飲む。
【参考】
8.17　賀茂郡へ兵一大隊派遣。山県郡高野村で社倉蔵の鍵を出すように要求される。

十八日　午の刻、上学す。申の下刻帰る。夜、水山生来る。
【語注】
・上学す　学校（塾）へいく。　　・水山生　水山烈　学問所の句読師を勤める。後に山田養吉に後事を託され、修道学校の理事長となる。
●口語訳　十八日　正午ごろ学校に行く。午後四時ごろ、帰る。夜、水山君がやって来た。

【参考】
8.18　県内東北部の諸郡に神帰隊（農兵）を派遣。

十九日　青木翁過ぎらる。夜、学校に直す。細君丸山氏に帰寧(きねい)す。
・青木翁　精しくは把握せず。　　・丸山氏　細君は丸山氏から嫁す。丸山氏については精しくは把握せず。　　・帰寧(きねい)　里帰りのこと。
●口語訳　十九日　青木翁が立ち寄られる。夜学校に宿直する。細君が丸山氏に里帰りする。

【参考】
8.19　御調郡内一揆勢数万人が尾へ乱入打ち壊し、三原城兵隊を取り囲み、出張県官（丹羽卓三）を竹槍で突き刺し、捕縛後海中へ投げ入れ殺害。20・21日暴動化。

廿日　雨　辰の刻学より退く。夜、丸山氏に至る。細君則ち雨を以て帰る能わず。
●口語訳　廿日　雨　午前八時ごろ学校より帰る。夜丸山氏のところに行く。すなわち細君が雨で帰ることができないからであつた。

廿一日　雨　是より先、民事極めて急なり。教授更番して学校に宿するを弁ずること速やかならざるべからず。傾間(けいかん)、事頗(すこぶ)る緩やかなるを以て必ずしも宿直せず。但し更番家に在り。事の急なるに備うるを以てす。
【語注】
・民事　世情　　・急　切迫している　　・更番　順番を追って交代で番をする。　　・弁ずる　処理する。
●口語訳　廿一日　雨　これより以前は、世情が極めて切迫いたので、教授が学校に交代で宿直する処置が迅速でなければならなかった。この頃事態がすこぶる緩和されてきたので、必ずしも宿直を要しなくなった。ただし、緊急時に備えて交代当番は家で待機している。

廿二日　終日家に在り。村上五郎来たりて諸生余の門に入るを嘱す。小川洋作、三村八郎来る。
【語注】
・小川洋作、三村八郎　精しくは把握せず。
●口語訳　廿二日　終日家にいる。村上五郎がやって来て諸生徒が入門できるように頼む。小川洋作、三村八郎が来る。

廿三日　入郡以後今日に至り始めて帷(い)を下ろす。船越普仏戦争誌を頼・日置二氏とに寄こす。渡六之介著す所なり。
・帷を下ろす　塾を開いて子弟を教える。

・頼　頼弥次郎（古楳）頼山陽の孫のことか？

●口語訳　廿三日　郡に説諭に行って以後、今日になって始めて塾を開く。船越氏から渡六之助が著(あらわ)した普仏戦争誌を頼氏・日置氏の二氏とわたしに送り届けてきた。

（以下略す）

＊この日以後の動き

8.27　尾道の一揆勢沈静化。

9. 2　豊田郡乃美村（現賀茂郡豊栄）で「騒立」。

9.15～9.18　佐伯郡白砂村（現湯木町）で、割庄屋、庄屋の打ち壊しがある。
増兵一中隊を派遣。

＊しだいに沈静化の方向に向かう。

9.23 長訓、旧芸藩各郡人民代表を召集して親しく説諭す。

10.9　長訓、宇品港より出帆、上京。

11.14 武一郎ら処刑される。武一郎　梟首　さらし首。　総計　573人

＊武一の首は、福島橋（旧名　川添橋：広瀬町より福島町に架すとある。）の西詰めに三日二夜晒されたと記録にある。

武一について

本名　森脇治政　屋号　西本屋　武一または武一郎　文政７年（1824）山県郡有田村十日市に生まれる。

生家は旅籠屋を営む。１町３反の田を有し、煙草の製造販売を副業とする。幕末期には没落過程にあった。

幼時から隣村壬生村の国学者井上頼定に学び、監水と号し和歌を詠んだ。武一の代になって西本屋は旅籠屋・煙草屋をやめ、寺子屋を開き、石門心学を教えた。

武一は、広島藩が国政向きについて心付きがあるなら申し出るようにとの通達に応じて、「乍恐国政方の義御願奉申上候口演書付けひかへ」を明治４年１月に提出している。「口演書」は全体として百姓一揆を引き起こすような過激な内容ではなく、困窮する村民に対する負担軽減などをもたらすようにとの提言である。また心学の立場から百姓一揆を否定している。しかし、県当局はすでに八月十一日の日記の参考の項で示したように、武一を一揆の首謀者と見なし、断罪をしたのである。

武一の罪状として

1．八月村々百姓共動揺の際に乗じて、旧知事を迎えるという名目で集会するという姦策に同意し、広島表へ参上したこと。

2．16郡一手の歎願書を書き、不用意にも「違勅云々」ということを書き綴ったこと。

3．それに加えて「異人捜索」を煽動し、城下打ち壊しに契機を作ったこと。

4．このあと造賀村（現東広島市高屋町）慶次郎に面会し、今般の歎願書が受け入れられないので、「異人或いは他の官人入来候時」に「衆を率い、罷り越し拒阻致すべき所存にて其の手配等縷々申含」み、「慶次郎大いに同意、所々触廻り民心団結」させるなど、全く欲心を逞しくせん爲め不容易の企てを首唱いたし、彼是帖朝憲を憚らざる」所業に及んだこと。

などが挙げられている。しかし、「広島県史」などによれば、歎願書を書いたのは単なる同意者・同調者に過ぎない。本地村滝蔵などの提案と依頼で作成したものである。八月九日、山県郡壬生村で県から説諭のため派遣された役人が危害を加えられるという事件が起こった。このことによって旧藩主引き留めの運動は農民騒擾へと騒動の性格が転化していった。そのことと壬生村の隣の有田村出身の武一が歎願書を書いたということとが重ねられ、誤解されて「壬生村武一」が当局によって不当に拡大されたのではないかという見方もある。

そして武一が広島城下へ出てきていたとしても、騒擾においてどのような指導的役割を担ったかなどに関して確証がないとされている。

「武一は旧藩主の旧恩に応えるため、その上京阻止をめざして城下に参集し、その学識を買われて藩主引留の歎願書を起草したものの、騒動開始後はその潮流から完全に離脱した存在ではなかったろうか。その意味において武一は『武一騒動』の真の『首魁』というよりも、捏造された被害者というべきものかも知れない。」と「広島県史」には述べられている。

人物往来

全身全霊で次の世代へ

平山　郁夫氏（旧中39回）

1972年に壁画が発見された高松塚古墳。翌年から現場責任者として模写に携わり、西壁女子群像を担当した画家平山郁夫さんに今の思いを聞いた。

－当時の思い出は。

（石室は）押し入れに入るような感じ。二人背中合わせで調査した。消毒のホルマリンのにおいでいっぱい。暗くて色の明るさが分からず苦労した。たとえば白だけでも十種類ぐらい作り、色を合わせていった。

－第一印象は。

長い間人に見られていないフレッシュな感じ。絵巻物程度の大きさで稚拙だが美しかった。頭をそろえて足元で奥行きを出すなど遠近法の工夫もあった。埋葬が済むと二度と（人に）見られないのに一生懸命描いたのが分かる。襟に日本的感性が表現され、渡来人の二世が描いたのかなと夢想しながら模写した。

－壁画劣化について。

形ある物は必ず滅す。これは宿命だ。現地保存が望ましいが、壁画を守るためにはやむを得ない。私は模写の時以来見ておらず、国の歴代担当者も順に退職していった。文化庁は同じ人にモニターなどで定点観測させ、もっと早い段階で手を打つべきだった。

－石室解体には。

壁画は約1300年間残ったが、外の空気が入り劣化した。解体は深海魚をいきなり地上に揚げるようなもの。人智を超えることが起こり得ることを覚悟してほしい。次世代に美しい状態で残せるよう、（担当者は）全身全霊で作業してほしい。成功を期待している。（中国　07. 4. 6）

日本水泳連盟が特別功労賞表彰

横地森太郎氏（高6回・ポルトガル元代表監督）

日本水泳連盟は5日、広島県坂町出身でポルトガルの元代表監督の横地森太郎さん（71）を特別功労者として表彰した。

ポルトガル在住の横地さんは長年日本代表選手の欧州遠征などに同行、裏方としてサポートした功績が評価された。同日に千葉県国際総合水泳場で開幕した日本選手権の開始式で表彰され、古橋広之進名誉会長らから花束や盾を受け取った。

横地さんは修道高、早大と進み、1958年に連盟推薦でポルトガルに指導者として招かれた。以来、五輪の監督を5度努めるなどポルトガルチームの指導に力を注いだ。

横地さんは「名誉ある賞をいただき、恥ずかしい思いもあるが、今後も日本チームのために喜んで協力していきたい」と述べた。連盟の特別功労者は横地さんで4人目。（中国　07. 4. 6）

都市活性化へ経済界連携

山本　一隆氏（高14回・中国新聞副社長）

広島経済同友会（755人）の新体制がスタートした。昨年、設立50周年を迎え、今年は次世代に向けて新たな一歩を踏み出す。新体制が重点課題に挙げる都市の活性化や道州制への対応などについて、同友会はどのように取り組もうとしているのか。筆頭代表幹事に就任した山本一隆中国新聞副社長に聞いた。

－昨年、設立50周年を迎えました。今後、同友会が果たすべき役割は何でしょうか。

この50年、設立当初の思いがずっと引き継がれている。一つは経営にかかわる人材の研修の場。もう一つは、地域への提言が大きな役割で、脈々とつながっている。今年は次の100年に向けての第一歩になる。方向性を定める重要な時期だ。地域が元気になるような提言をしていきたい。

－筆頭代表幹事として何に取り組みますか。

どうしてもやりたいのは広島市の都市としての活性化。そのために「広島地域活性化委員会」を新設した。今、広島市中心部では課題がたくさん出てきている。JR広島駅周辺の再開発をはじめ広島市民球場（中区）の跡地利用、中心部の道路整備などだ。

委員会では、まず何をやるべきかという優先順位を付けたい。同友会には750人を超えるメンバーがおり、アンケートなどを通じて経済人が考える順位付けを示したい。それを行政に積極的に提言し、実現の方向へ一歩でも進めるように後押ししていくということが私の一番の思いだ。

－広島市は他の政令指定都市に比べて元気がないといわれます。なぜでしょうか。「札仙広福」といわれる札幌、仙台、広島、福岡の四政令市の同友会は年１回、会合を持っており、情報交換をしている。よく広島は元気がないといわれるが、最近の景気回復の局面の中、企業の景況感や設備投資、雇用などを見ると、他の政令市よりもいい。

問題は、なぜ広島に閉塞感があるかということだ。それは都市問題に大きな原因がある。広島の都市開発が遅れている一因は、他の三政令市に比べ、県と市、行政と経済界の連携があまりにも希薄。福岡がなぜ元気に見えるかというと、非常に産学官の連携がいいからだ。

－行政とどのように接していきますか。

行政を巻き込んで、まちづくりを進めるため、積極的に一緒に歩むことができる方向がないものかを探っていきたい。そのためには経済界自身の連携がまず必要だ。他の経済団体と定期的な協議会を開きたい。意見を交わし、経済界全体の総意として行政に話をすればインパクトが違うのではないか。連携の力で物事を動かすことができると思っている。

－新体制では道州制への対応も重点課題に挙げています。どう取り組みますか。

国、地方とも財政が厳しい中で、これからは水平分業して各地域で責任を持って行政を行う必要がある。道州制は一つの大きな選択肢。中四国の九県の同友会に声を掛けて、道州制を議論した結果、とりあえず中国と四国は別々で議論しようということになった。

まず地域の視点で道州制の在り方を考えるため「道州制委員会」を新設した。さらに、中国五県を一つの州とした場合の各地域の役割分担を議論し、中国州のマスタープランをつくりたい。夢を語れるビジョンづくりを進めていく。

（中国　07. 4. 19）

NTT社長に三浦氏

三浦　　惺氏（高15回・NTT社長）

NTTは18日、三浦惺副社長（63）が社長に昇格する人事を固めた。和田紀夫社長（66）は代表権のない会長に就く。同日、総務省などに伝えた。和田氏は社長就任５年で、光ファイバー回線が普及期に入り、事業構造の転換に向けた基盤が整ったと判断。次期通信網の整備を新体制に委ねる。６月下旬の株主総会後の取締役会の決議を経て正式に決定する。

NTT社長には1985年の民営化以降、事務系と技術系が交互に就いてきた。今回は事務系が二代続き、たすき掛けの慣例が崩れる形になる。

NTTは2010年までに光回線を３千万回線敷設する中期経営戦略を策定、三浦氏は同戦略の推進責任者として和田氏を補佐してきた。和田氏は2000年以降、空席になっていた会長職に就き、国際戦略などを担当する。

NTTは同時にグループの首脳人事も固めた。NTT東日本、西日本、NTTドコモ、NTTコミュニケーションズの現社長はいずれも留任。NTT本体以外のグループ主要企業で社長が交代するのはNTTデータのみとなる。主要グループ企業のトップを温存して、NTT新社長の三浦氏を支える体制を敷く。　　（日経　07. 4. 19）

不正解明へ真価問われる「有尽無報」

林　　正夫氏（高11回・広島県議会議長）

藤田雄山知事後援会の政治資金不正事件への対応に、どんな姿勢で臨むのか－。「県民の信頼回復に全力を尽くす。公平、公正に中立の立場で務めたい」。９日の就任会見では、言葉を選んだ。知事に最も近いとされるのを意識してか、「中立」を強調した。

８年前、初めて議長選の候補に名乗りを上げた。当時所属していた最大会派・自民党議員会の候補選び。「ガラス張りの議会に」。二期八年を務め、続投を狙った当時の桧山俊宏議長に挑んだ。会派内の投票の結果、三票差で敗れた。

そして４年前。新会派を旗揚げし、別の自民

党系の新会派の候補を推し12年ぶりの議長交代を実現した。塗り変わった勢力図の下、歩調を合わせる会派の信頼を保ち自身も上り詰めた。「より民主的な議会にする。この気持ちは8年前から変わらない」。事件の真相解明を含め今後、その真価が問われ始める。

祖父、父とも県議。父も議長を務めたが、もとは政治家志望ではなかった。大学卒業後は実業界に身を置いた。転機は1983年、広島市が政令市に移行してから初の県議選。青年会議所の仲間たちに中区からの立候補を要請され、仲人で知事の実父、故藤田正明参院議員から「『有尽無報（尽くすありて報いなし）』。このつもりなら、やりなさい」と助言を受けた。後押しの言葉を今も座右の銘とする。

中学から本格的に水泳を始め、修道高3年の時には100メートル自由形で全国3位。大学水泳部では主将を務めた。「プランターで花を育て、自宅の屋上や玄関を彩るのが楽しい」。中区で妻、二男夫婦、孫二人と暮らす。

（中国　07. 5. 11）

もっとサービス向上

大田　哲哉氏（高11回・㈱広島電鉄代表取締役社長）

広島都市圏を走る路面電車の乗客数の減少傾向に歯止めがかかりつつある。昨年度は2年連続で前の年度を上回った。運営する広島電鉄の大田哲哉社長は「低床のLRT（次世代型路面電車）を増やすなど、乗ってみようと思わせるサービスを続けてきた。その効果が表れた」と話す。

今後はLRTで「ベビーカーだけでなく、自転車も乗せられるようにしたい」と意気込む。天然ガス車やノンステップ車両を導入してきたバスの乗客数も、昨年度は都市圏は前年度比プラスとなった。「通勤は日常生活の一部。サービス向上が乗客数増につながる」と手応えを感じているようだ。

（日経　07. 5. 25）

広島県議、広島市議当選おめでとうございます。

平成19年4月8日投票された県議選（定員66）と広島市議選（定員55）で修道OB24名の当選が出た。当選された方々は次のとおり。

（敬称略）

広島県議

広島市中区	林	正夫	（高　11）	自現
	日下	美香	（大人8）	公現
東区	緒方	直之	（高　44）	自現
南区	中原	好治	（高　33）	無現
西区	砂原	克規	（高　24）	自現
	山木	靖雄	（高　14）	自現
安佐南区	栗原	俊二	（大法4）	公現
佐伯区	冨永	健三	（高　20）	自現
	蔵本	健	（高　43）	無新
呉市	城戸	常太	（新中14）	自現
山県郡	野村	常雄	（高　12）	無新
東広島市	井原	脩	（新中21）	無新
				12名

広島市議

東区	橋本	昭彦	（短4）	無現
西区	原	裕治	（大商13）	公現
	豊島	岩白	（大商33）	無新
安芸区	三宅	正明	（高　43）	無新
安佐南区	土井	哲雄	（高　6）	自現
	谷口	修	（院在）	自現
	田尾	健一	（短　12）	社現
安佐北区	今田	良治	（大商6）	自現
	若林	新三	（大商15）	無現
	増井	克志	（高　9）	無現
	木島	丘	（高　4）	自現
佐伯区	児玉	光禎	（高　12）	自現
				12名

訃　　報

小尻　正俊氏

（旧中39回　修道学園（中・高）同窓会幹事、修道学園同窓会連合会幹事）

2007年３月18日　ご逝去　享年 76歳

氏は 2002年３月に修道学園（中・高）同窓会幹事として選任され、同窓会の発展に寄与された。平山郁夫画伯とは在学中、寮生活で寝食をともにされ、以後も友情の絆を深められた。

2003年９月13日除幕の修道中学校・高等学校校舎等整備事業を記念して同窓会から学園に寄贈された陶板画「希望の光　安芸の小冨士」の製作にあたっては、画伯との原画創作についての交渉にご尽力をいただいた。

藤井　喜通氏

（元学校法人修道学園専務理事）

2007年４月５日　ご逝去。享年87歳

氏は1985年７月から1990年５月までの５年間にわたり、学校法人修道学園専務理事として、当時の中野理事長、土谷理事長のもと学園経営に貢献された。

ことに、学園就業規則、その他諸規程の整備、充実にご尽力された。

的場　克己氏

（元修道中学校・高等学校教諭）

2007年５月４日　ご逝去　享年78歳

氏は1950年４月１日から1989年３月31日までの39年間、社会科（日本史）の教諭として修道の教育に携わられた。

この間、学而寮舎監、教務部長を歴任された。旅行がご趣味で、多くの教職員、卒業生とともに日本全国、さらには海外へも度々渡航され、添乗員顔負けのお世話をされた方でもあった。

鈴木　　清氏

（旧中33回　元学校法人修道学園理事長　元修道学園同窓会会長代理、元修道学園同窓会連合会幹事）

2007年６月11日　ご逝去。　享年 82歳

氏は理事長代理を務められた後、1992年４月から1996年３月まで学校法人修道学園理事長に就任された。

同窓会活動へは1970年１月から1999年３月まで修道学園同窓会の幹事として参画され、この間、副会長、会長代理の要職を歴任された。

また1994年６月からは、発足した同窓会連合会の幹事としてもご尽力をいただいた。

修道学園同窓会役員在任中においては、1977年７月から開始された修道中学校・高等学校体育館並びに本館建築にともなう募金活動において、募金委員長として奔走され、目標額を超える５千３百万円余の実績をあげられた。

辻井　利男氏

（元修道中学校・高等学校教諭）

2007年６月17日　逝去　享年84歳

氏は1950年４月１日から1983年３月31日までの33年間にわたり、理科（物理）の教諭として修道の教育に携わられ、この間、学而寮舎監を歴任された。

同窓大会や同期会などにも積極的に参加され、暖かく、人情味あふれるお人柄は多くの卒業生から慕われた。

田内　萬作氏

（旧中36回　元修道学園同窓会会長代理、修道学園（中・高）同窓会幹事、修道学園同窓会連合会顧問　日新商事（株）社長）

2007年６月28日　逝去　享年82歳

氏は1975年１月に修道学園同窓会幹事として選任され、長年にわたり同窓会の発展に寄与された。

この間副会長、会長代理の要職を歴任された。

また、1994年４月に発足した修道学園同窓会連合会の設立にも尽力され、顧問としてご指導をいただいた。

1984年５月から 1996年５月までは卒業生選出学園評議員として学園の発展にもご尽力をいただいた。

心からのご冥福をお祈りいたします。

事務局だより

◎平成20年3月は修道学園(中・高)同窓会、修道学園同窓会連合会の役員改選となります。
役員改選についての諸手続きやご連絡を取らせていただきますのでご協力よろしくお願いいたします。

◎会報への積極的なご寄稿、支部総会・同期会などの報告、ご多忙中にもかかわらず配慮いただきありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。